



第百二十六號 (第十一卷) 昭和六年十月

三度び改曆問題について

(卷頭言)

われ等の度々の叫びによつて、曆法改正の問題に關し、世間は漸く動きかけて來たらしい。何事も御上^{お上}の御命令に盲從することに數百年來慣らされて來た我が日本の同胞たちも、もはや何事まで惰眠をむさぼつてゐるわけには行かない。殊に、元來、民論の盛んな關西方面に於いては、京都、大坂、神戸、岡山などの地方々々に於いて、商工業者や、宗教家や、銀行や會社員や、交通通信事務者、學校教育家等々々、いろんな人々の改曆座談會が續々と開かれて、各方面からの代表的な意見が交され、又、各自の立場から熱心な研究が行はれつゝある。こんどの改曆問題について萬事立ち遅れた我が國ではあつたけれど、とにかく此うして一種の研究熱が作られつゝあることは喜ばしいことである。

當面の責任者である外務省條約局も、八月の末頃から、關西方面の此の狀勢に動かされて、多少の狼狽氣味ながら、内外に對して、ジツとして居れなくなつたらしい。去る九月2日と4日には、まづ各省の事務官たちを招いて協議會を開いたといふ。之れ勿論成さざるには優るわけであるけれど、何故もつと大規模の運動を起さないのか、了解に苦しむ次第である。諸外國の如く、

- (1) すべからく、我が國の朝野代表者を含む國內委員會を組織すること
 - (2) 國際聯盟の三案に對し、成るべく廣く意見を募ること、
 - (3) 來る十月のジュネヰヴ會議に責任と見識ある代表者を送ること、
- 上の三つを、一日も早く具體化するのが急務と思はれる。

ジュネヰヴ會議は、もはや一ヶ月以内に亘つてゐるではないか！ しかも我が國內は何一つ纏つた意見が無い。政府は一體何を以つて列國會議に臨まんとするのであるか？